

〈論文〉

中国人編入留学生のライフストーリー研究 (1)
— 編入留学後の問題に着目して —

久野弓枝

要旨

本稿では、中国人編入留学生（仮名：タンさん）にインタビューを行い、ライフストーリーを作成し、編入留学後の問題点とその要因について考察した。その結果、タンさんの問題は日本語能力だけではなく、両国の価値観の違い、ゼミの選択理由、カルチャー・ショックに対する対応能力の不足、および、モデルとなる人材の不在などが問題の要因となっていることが分かった。今後はこのことを踏まえてアサーション・トレーニング¹等も考慮したサポートについて検討する必要がある。

キーワード

中国人編入留学生、ライフストーリー、重要な他者、ゼミ、アサーション・トレーニング、居場所

1. はじめに

2013年5月1日現在、留学生数は13万人を超え、そのうちの約半数が学部留学生である。この中でも学部編入留学生に焦点を当てることを筆者は考えた。その理由について、学部転入留学生は母国と日本の2つの国における教育により成果が期待される一方で、各教育機関における就学期間が短くなること、さらに初年次からの学生に比べ環境適応に使用できる期間が少ないなど、彼ら特有の問題が存在するのではないかと考えたからである。さらに、筆者は最初の調査の出身国を中国に限定した。これは中国からの留学生が留学生総数の60%強を占めて最も多いことと同時に、近年はその割合が減少傾向にあることも考

¹ 自分の考え、欲求、気持ちなどを率直に、正直に、その場の状況にあった適切な方法で述べるための訓練のこと。そこには、一人一人の自己表現を大切にすること、自分も相手も大切にコミュニケーションといった意味が含まれている（平木、2008）。

慮した。高（2010）は、中国人留学生の日本離れの原因について、「留学生10万人計画」により、質の低い留学生を継続的に受け入れた結果、日本の教育ブランドの価値が失墜したと述べている。

中国人学部留学生の研究には、アカデミック・ジャパニーズに関する研究（中山，2011）、異文化適応を青年期の課題として捉えた研究（船木，2003）などがある。また、学習意欲の変化要因（王・大浦，2010）やサポートに関する研究（久野，2011）などがある。しかし、いずれの研究も調査協力者が初年時から日本の大学に入学した留学生や短期留学生であり、編入留学生に関する調査ではない。このため、大学において重要な役割を果たすゼミ活動に関する論考は十分とは言えない。一方、中国からの学部編入留学生を対象にした研究には、堀井（2013）・（2014）の研究がある。そこでは、2名の編入留学生にインタビュー調査を行い、編入留学生が専門教育にソフトランディングするためには、留学前後のアカデミック・ジャパニーズ習得の重要性が述べられており、大変参考になる。しかし、堀井（2014）の「日本で授業（専門）に参加して困ったこと」という質問に対して、「ゼミ」という回答があるにもかかわらず、問題の詳細を理解することは難しい。

筆者は学部編入留学生の教育において、堀井（2013）・（2014）が述べているように、専門教育につなげるためのアカデミック・ジャパニーズは大変重要であるが、留学生は、日々、変容していく存在であるため、中国時代の連続性から彼らの成長にも目を向けながら、編入留学生が抱える問題について検討する必要があると考える。

佐藤（2013）はライフストーリーを通して、中国時代の連続性から留学経験を分析する必要性を述べている。本稿でも、佐藤（2013）の分析方法を参考にした。中国から日本の提携大学に3年次に編入した留学生（仮名：タンさん）の幼少期から日本の大学に編入後の約1年間のライフストーリーを紹介する。留学生にとって、中国とは異なるゼミ活動、課外活動とはどのようなものなのか、当事者の視点から考え、編入留学生の問題とその要因を明らかにしたい。彼女が日本の大学で抱えた困難や葛藤、それらを乗り越えた経験をライフストーリーの形で整理することは、彼女と同様の編入留学生に対する有効なサポートを考える上でも貴重な一資料になりうると考える。

2. 調査の概要

タンさんに研究の内容を説明し、調査の承諾を得た後、筆者の研究室で半構造化インタビューを2度実施した。インタビューはICレコーダーに録音し、その内容をすべて書き起こした。インタビューは日本語で行った。

第1回 2013年6月13日 要した時間は約1時間半

第2回 2014年3月26日 要した時間は約3時間

2-1. 分析方法

佐藤(2013)を参考に実施した。文字化した資料を何度も読み、会話のまとめりごとに、見出しをつけ、見出しと要約をカードに書きだした。そしてそのカードを時間軸に並べ替えストーリーを作成した。作成したストーリーはタンさんに確認してもらい、修正を受けた。

3. タンさんのステージごとのストーリー

タンさんについての理解を深め、彼女の変容を分かりやすく示すために、彼女の幼少期から日本の大学に編入後のストーリーを紹介する。ストーリーの中で「 」で示している部分は、彼女の発言をそのまま引用したものである。

3-1. 幼少期

タンさんは中国出身の22歳の女性である。海に近い田舎町で生まれ、周囲の人はみな優しい人ばかりであった。家族は両親と2歳年上の姉と1歳年下の弟の5人である。家族はクリスチャンで子どものころから教会に行っていた。

父は小さな工場を経営していたが、経済的に苦しかったため、タンさんが幼稚園の時、両親は弟だけを連れ、A市へ出稼ぎに行った。そのため、彼女は幼稚園のころから12歳まで姉とともに祖父母に育てられた。彼女の出身地では出稼ぎに行く親が多く、彼女のような境遇の子どもたちも多いため、特に寂しさを感じたことはなかったという。タンさんは小学校時代の自分を振り返り、次のように語った。

筆者：子どもの時は、どんな感じ？

タン：ずっとおばあちゃんと一緒でした。ちょっと男っぽいです。すごく今よりも明るい。みんな温かくて、故郷で育てられたのは本当に幸せって感じです。

3-2. 小学校高学年から中学校時代

6年生の秋学期から両親が住んでいるA市へ移った。A市の小学校では英語教育がすでに行われており、今まで英語を勉強したことがなかったタンさんは、英語が分からず辛かった。初めて受けた英語の試験が30点だったことは今でも忘れられない。英語の勉強は大変だったが、精神的にはそれほど寂しさを感じなかった。それはA市が出稼ぎの町だった

ため、タンさんのように他の町から転校してきた子どもが少なくなかったからである。

中学校に入り、A市で一番の進学校に入学した優秀な先輩との出会いがタンさんの励みになった。先輩の勉強の仕方や経験談を聞き真似をして勉強に励んだ結果、中学校2年生の時には学年（1学年150人ぐらい）でトップになることができた。その時「中学校では勉強が一番できている」と感じた。しかし、中学校3年生になった時には、クラス替えなどがあり、遊んでしまい、自分が希望していた高等学校の試験に合格することができなかつた。

タン：中学校2年生になったときには、トップという感じでした。A市で一番いい学校に入った先輩の話を聞いて自分はすごく励まされました。でも3年生になって成績が下がって、自分は高校進学のための試験に落ちました。

3-3. 高等学校時代

全く予想していなかった高校に入り、落ち込んだ。また教育熱心な両親は彼女が有名な進学校に合格することを信じていたため、両親との口喧嘩は堪えなかつた。高校浪人も考えたが、努力したら中学校の時のようにトップになれると信じて朝から晩まで勉強を続けた。しかし、中学校時代のようにトップになることができず、さらに落ち込んだ。タンさんは高校時代を次のように語っている。

タン：自分が考えたこともないような学校に進学してショックで、その1年間は地獄でした。心臓がバクバクいたり、痛くなったり、心臓病みたいになりました。

3-4. 中国B大学の日本語学科に進学する

タンさんはA市の蒸し暑い気候が好きでなく、涼しい地域で大学生活を送りたいと思っていたが、両親の希望でA市にあるB大学に進学することを決めた。B大学は高いレベルの総合大学であったが、自分の希望大学ではなかつた。言語に興味があつたため、専門を日本語に決めた。本当はフランス語かドイツ語を勉強したかったが、B大学には英語と日本語の学科しかなかつたため、学んだことがない日本語を選択した。1年生の時、日本語のクラスは毎日、少なくとも3～4時間あり、毎朝、5時半から6時には起きて、日本語のテキストの朗読を行っていた。厳しい担当の先生の管理の下で、テキストをすべて暗記しなければならなかつた。そのため、毎日、ストレスを感じていたが、1年生の後半から担当の先生が変わり、日本語の授業では演劇なども取り入れられ、日本語の勉強が楽し

くなった。そして1年生の終わりには、日本語で基本的な会話ができるようになった。勉強だけではなく、スポーツにも励んだ。サッカー部とソフトボール部の両方に入り、「高校生活から解放された」と感じた。何事にもチャレンジしたいという気持ちで一杯になった。なかでもサッカー部の活動はコーチや先輩に恵まれ、充実した時間を過ごすことができた。コーチや先輩はクラブ活動を楽しむことを重視していたので、楽しみながらクラブ活動に参加することができた。

2年生になり、文法を勉強することが大好きになった。しかし、彼女が日本に留学しようと思ったのは、日本語能力の向上だけが理由ではなかった。タンさんは留学を決めた理由を次のように語った。

タン：自分は日本語を勉強していてやっぱり一度は行った方がいいと思って。あとは、親から離れたい、自立したいという気持ち。自分の好きなように生活できるようになりたいです。自分は日本にずっと残りたいので、交換留学じゃなくて2年間の契約がある大学を選びました。2年間の契約があったのは日本のC大学だけ。

3-5. 日本のC大学へ3年次編入する

3-5-1. Dゼミに参加する

中国にはゼミがないため、ゼミを選ぶ際、戸惑ったが、屋外での活動やイベントが多いDゼミを選んだ。ゼミの内容にはそれほど関心なかったが、中国では教室で勉強するのが一般的で、屋外での活動がなかったため、Dゼミの活動を魅力的に感じた。また、彼女以外に留学生がいなかったこともDゼミを選択するうえで重要なことであった。タンさんは「日本に来たのだから、日本の社会に融合し日本人の友達を作らないと意味がない」と思った。

Dゼミではゼミのテーマに関する新聞の記事や文献を読んだが、初めは地名などの漢字が読めなかった。人に分からないことを聞くのが苦手であったため、最初は黙っていた。中国では困っている人がいたら、助けるのが美德とされていたため、教えてもらえない理由が分からず、苦しかった。ゼミの人たちを「冷たい」と感じるようになった。それから少し経ち、タンさんが漢字を読むのが苦手だということが分かったときには、ゼミのメンバーが読めない漢字などを教えるようになった。しかし、そのころには、ゼミのメンバーに迷惑をかけるのは良くないので、自分のことは自分でしなければならないという心境になっていた。不明なところを聞くことは相手の迷惑になると感じた。日本人の中で間違った日本語を使ったら恥ずかしいと感じ、話す量を減らしているうちに質問や発言ができな

くなった。発言することが苦しくなっていったのだ。さらに、彼女がゼミの活動についていけなくなった理由には専門に関する知識の不足があった。このため、何を話したらいいのか、分からなくなってしまった。このことは、日本語能力の問題だけではなかった。全く知識がない専門について、20～30ページの文献を読む必要があったが、もともとゼミの内容には関心がなく、「中国では勉強をたくさんしたので、日本では中国で体験できないことをしたい」という思いもあり、中国にいるときのように勉強に時間を投じなかった。このため、結局、専門に対する理解を深めることができなかった。

3-5-2. Dゼミの学習会

Dゼミでは、ゼミの他に1週間に2回ほどの勉強会があったが、休日にも勉強会やイベントがあり、「気持ち的に受け入れられなかった」。中国では、どんなに忙しくても休みの日は休む、という習慣があるため、休みに対する日本と中国の考え方は異なっていると感じた。休みに対する、不満もあり、勉強にも次第に興味がなくなり、夏休みごろには勉強会をさぼることが増えた。また、勉強会に出席しても精神的に自分をうまくコントロールできず、暗くなった。

タン：色々なイベントがあつたり、なんでそこまでって感じ。休みの日は自分は遊びたいです。

3-5-3. Dゼミで受けたカルチャー・ショック

飲み会などがあつた時に、思わずゲップをしてしまい、何回も汚いと言われて、とても恥ずかしく、傷ついた。しかし、相手との関係（和）を考え、相手を傷つけたくなかったため、反論をすることができなかった。中国でゲップをすることは、体の自然な反応であり、汚いと言われたことは一度もなかった。

また、一部の人には中国製の商品に対する偏見があつた。彼女が使っていた鉛筆を他の学生が彼女から借りて使っていたが、中国製だと分かって捨ててしまった。この事件に対して、彼女はショックを受け、その時の心境を次のように語っている。

タン：口に出すのは何か苦手です。もし自分が何か言ったら、相手が傷つくかなって思つて、言わなかったんです。

3-5-4. Dゼミをやめる

先輩たちは、タンさんが反省会などで上手に説明できなかつた時など、かばってくれたが、逆に罪悪感を感じるようになった。誰かに言われたわけではないが、自分の存在が相手にとって迷惑だと感じ、自分が嫌いになった。人と接触してうまくいかないときは、自分のせいだと感じ、対人障害のようになった。ゼミにおいて自分の役割を見い出せず、居場所がないと感じた。そして、居場所がないので、ゼミをやめた。

タン：これ以上迷惑をかけたなら自分が嫌いになります。自分はそこにいてもいなくても同じ。

3-6. 課外活動

Dゼミの勉強会に入会したころ、日本の祭りに出場するため、Fクラブ(仮名)にも中国人の友人3人と入った。日本の祭りを体験することは楽しいし勉強になると思った。そのクラブでは祭りに参加するために、合宿なども行い踊りの練習をした。クラブのメンバーと行動を共にし、積極的に声を掛け合う中で、友達ができた。みんなで支え合い、メンバーの一人という実感がした。まるで家族と一緒にいるかのように感じた。タンさんは祭りに参加し、中国と日本の祭りの違いを実感できただけでなく、祭りの楽しさも知った。

3-7. ゼミを変更する

3年生の後期にDゼミから中国人の教員が担当しているEゼミに移った。ゼミの変更は中国のように特別な試験があるわけではなく、ゼミの担当者の許可を得るだけで、変更することができた。Eゼミに変更した理由は、中国人の留学生が多いため居場所が見つけれられると思ったからだ。Eゼミは、日中間の比較を中心に行うゼミだが、タンさんがEゼミに入った時には、「中国的抒情と日本的叙情」について、勉強していた。Eゼミの形式は教員が一人ずつ指名して、学生が答えるという「中国形式」の指導方法であった。聞かれたら、答えなければいけないため、予習もたくさんした。教員からのプレッシャーを感じ苦しい時もあったが、「中国人の考え方を理解し、完璧な日本語じゃなくても言いたいことを分かってくれる」という安心感があった。Dゼミでは中国人の考え方や日本人の考え方が違うので、言おうと思っても言えなかつたことがあったが、Eゼミのメンバーは、ほとんど中国人のため、言葉で伝えられないことが軽減し、精神的に楽になった。さらに、ゼミの内容も彼女の興味に近かつた。しかし、ゼミを変更しても精神的な落ち込みは続い

た。ストレスを解消するために、家にこもり暴飲暴食をするようになった。「なぜ自分はこのように食べてばかりいるのか」分からなかった。さらに、「自分が生きている意味」を考えたが、答えは見つけられず、精神的に落ち込み、自信を失った。

3-8. 教会へ行く

4年生の春ごろから、近所の教会の日曜礼拝に参加するようになった。教会に行きはじめた理由は、2つある。第1に「このままの自分ではいけない」と感じたからである。第2に、ニュージーランドに留学していた姉が留学先のニュージーランドで教会に行っており、姉の性格が非常に穏やかになったのを感じて、自分も教会に行けば、変われると思ったからだ。家がクリスチャンで幼少期から教会に行っていたため、日本で教会に行くことに対しては抵抗がなかった。

牧師と話し聖書を読むことで、「自分は寂しい存在なのではなく、認められている存在」だと感じた。小さいことから喜びを見いだせるようになり、人に対する感謝の気持ちも湧いてきた。例えば、誰かと楽しくコミュニケーションを取ることができた日は、「一緒に話すための時間をいただいて、私と話してくれた」というように感じるようになった。視点を自己から他者へ移すことで、「他人に迷惑をかけている存在」という気持ちから、「他の人は自分のために時間を使ってくれている」と考えるようになった。そうすると、今まで気づけなかった自然の美しさや周りの美しさが見えるようになった。

3-9. 国際交流クラブ

日本語の担当教員から誘われ、大学の国際交流クラブにも入った。初めのミーティングは人が多すぎて逃げ出したい気持ちだったが、中国人留学生からリーダーを頼まれたことがきっかけで、「チャンスだ」と思った。中国で学べないことをこのクラブを通して学べると思った。日本語の担当教員からの再三に渡るメールや姉からの励ましもあり、「こんなに自分を大切だと思ってくれている人がいる」と感じた。リーダーになったら、「このクラブで貢献できるかな」と思い、「居場所が見つかりそうで楽しくなった」。4年生の春学期には、学生主催の国際交流パーティーを企画し、自分は人を喜ばすようなイベントを企画したり計画することが好きなことが分かった。

4. 考察

インタビューの内容は卒業に至るところまで続くが、本稿ではタンさんが問題を乗り越えたと思われる4年生の春学期初めまでのエピソードを分析することにする。

C 大学編入後のタンさんの状況は決して順風満帆というものではなかった。実際、編入直後においてはゼミの活動やそこでの人間関係で挫折を味わい、対人恐怖症気味にもなっている。それは、なぜか。その要因と思われるものを列挙する。

第1に、ゼミの選択理由が挙げられる。ゼミ選択の際に、学びたい内容を重視するのではなく、「母国で経験できない活動」、「中国人がいないゼミ」ということを重視し、選択してしまった。その結果、ゼミの内容に関心が持てず、専門知識が全くなかったため、授業についていけず、学習意欲が落ちていったと思われる。

第2の要因として、中国と日本の価値観の違いも挙げられるだろう。タンさんは漢字が読めない時、すぐに教えてもらえると思った。なぜなら、「中国では困っている人がいたら、助けるのが美徳とされる」という意識があったからである。しかし、すぐには彼女に教えてくれる人はおらず、「日本では自分のことは自分でしなければならない。迷惑をかけられない」と感じはじめ、「話す量を調整している」うちに、発言できなくなっていく。また、「中国と日本の休みに対する考え方が違うから、気持ち的に受け入れられなくなって、やる気がなくなった」と述べていることから、母国との生活上の価値観や意思の表現法の違いが学習動機に影響を与えていることは明らかであろう。

第3の要因として、カルチャー・ショックや偏見に対する対応能力が挙げられる。タンさんは自分の気持ちを言うのが苦手であった。それは、「自分が相手に傷ついたら、相手が傷つく」と思ったからだ。この発言から、日本語が話せなくなるのは、日本語の表現力不足だけが理由ではなく、第2の要因とも関係してくるが、自分の気持ちを必要以上に抑えていることが挙げられるだろう。自分らしく自己表現をしていくためには、アサーション・トレーニング等の考え方も重要であると考えられる根拠もここにある。

さらに第4の要因として、中国の中学校時代には成功を体現したモデルとなる人がいたが、編入直後は彼女のモデルとなるような先輩や日本人学生がいなかったことを挙げる。ゼミには同国人の先輩はおらず、「日本人と仲良くしなかったら意味がない」という思いが強すぎ、生活上の問題を共有する相手を見つけていないことに筆者は注目する。

一方、日本の祭りに関するクラブ (Fクラブ)、教会、国際交流クラブは、タンさんにとって、心地の良い場所、自分が挑戦できる場所と感じられたのはなぜだろうか。結論から言うと、重要な他者が存在し自分の居場所だと感じられたからであろう。タンさんの場合、重要な他者とは、牧師、姉、日本語の担当教員、国際交流クラブの友人、Fクラブの仲間であろう。タンさんに積極的に声をかけ、彼女の話聞いてくれる人びとがいた。ここでは、自分が認められていることが実感でき、人間的な共感が得られた。また、自分の役割を発見し、居場所を見つけることができた。Fクラブや国際交流クラブに参加してい

る様子は中国でサッカー部に所属していた明るく活発なタンさんの姿に重なる。

5. おわりに

本稿では、中国人編入留学生のライフストーリーを通して、彼女が編入後に抱えた問題と要因について考察した。その結果、日本語能力やゼミの内容だけが問題を引き起こすわけではないことが示唆された。また、問題を解決していく方策として、重要な他者の存在やアサーション・トレーニングの考え方が参考になると思われるが、紙幅の都合上、別の機会に改めて検討したい。

彼女のストーリーに登場する問題の多くは学部編入留学生に共通するものと考えられるべきではないだろうか。特に、母国と日本、それぞれの就学期間が短くなることについてはもっと注意を払ってもよい。とりわけ日本での就学期間中に行わなければならない選択の中には、編入後の手続きに関わるものの他、他の一般学生と同様、卒業後のキャリアに関わる重要なものも多い。周囲が不案内な中で多くの重要な選択を日々続けなければならない環境の影響、すなわち、問題を冷静に処理できず彼らが深刻な状況に陥る危険を我々は軽視してはならない。タンさんのように困難な状況を改善させることは少なからぬ幸運が必要であるが、編入留学生の経験を丁寧聞くことで、彼らの負担を軽減させることができると信じる。

今後の方針として、調査協力者を増やし、学部編入留学生の差異および共通点を調べながら、アサーション・トレーニング等も取り入れたサポートについて検討したい。

< 参考文献 >

- 王明潔・大浦洋子 (2010) 「中国人留学生の学習意欲の変化に影響を及ぼす要因」『九州情報大学論集』 12 pp.13-19
- 久野弓枝 (2011) 「留学生が抱える不安や問題とそのサポートについて—札幌大学の留学生に対する質問紙調査とインタビュー報告—」『札幌大学総合論叢』 第 31 号 pp.55-74
- 高 明珠 (2010) 「中国人留学生の視点からみる日本の留学生政策」『同志社政策科学研究』 第 12 卷 (第 1 号) pp.1-15
- 佐藤正則 (2013) 「留学経験の意味と自己実現についての考察—元留学生のライフストーリーから」『言語文化教育研究』 11 pp.308-327
- 中山亜紀子 (2011) 「学部留学生対象の日本語教育を考える—中国人男子学生のライフストーリーを通して—」『アカデミック・ジャパニーズジャーナル 3』 pp.78-85
- 日本学生支援機構 (2014) 「平成 25 年度外国人留学生在籍状況調査について—留学生受け入れの状況—」
http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/documents/data13.pdf (2014 年 5 月 28 日)
- 平木典子編 (2008) 『アサーション・トレーニング—自分も相手も大切に自己表現』至文堂 pp.7-8

- 船木聡美 (2003) 「異文化適応における発達の視点の導入：中国人女子留学生のライフ・ストーリーの予備的分析」『お茶の水女子大学 発達心理学紀要』第5号 pp.95-102
- 堀井恵子・島田徳子 (2013) 「中国からの編入留学生の留学アーティキュレーション上の課題—J.GAP 中日アーティキュレーションプロジェクトのインタビュー調査から—」『日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.383-384
- 堀井恵子 (2014) 「日本留学におけるアーティキュレーション上の課題 中国人留学生へのインタビュー調査から」『武蔵野大学グローバル教育研究センター』第3号 pp.75-84

謝辞

調査協力者のタンさん（仮名）には心から感謝申し上げます。

付記

本稿は、平成 25 年度科学研究費基盤研究 (C) 「ライフストーリーを用いた学部留学生の将来像の形成過程に関する研究」(研究課題番号 25370594) の助成を受けて行われたものである。